

『インド考古研究』第26号 抜刷  
インド考古研究会  
2005年6月

コメント：古インド＝イラン語文献学から  
Comments: From the Viewpoint of Indo-Iranian Philology

後 藤 敏 文  
GOTŌ Toshifumi

*INDO-KŌKO-KENKYŪ* – *Indian Archaeological Studies* Vol. 26, Offprint  
Indian Archaeological Society, Tokyo  
June 2005

後藤 敏文 『インド考古研究』第 26 号 (2005 年 6 月) 179-191  
古インドイラン語文献学から From the viewpoint of Indo-Iranian Philology

## 訂正一覧

頁	行	誤		正
180	-12	<i>vṛṣa-śiprá</i>	→	<i>vṛṣa-śiprá-</i>
		<i>vṛṣṣn-</i>	→	<i>vṛṣan-</i>
	-7	<i>anās- dāsyūn</i>	→	<i>anāso dāsyūn</i>
181	10	<i>pra-vác</i>	→	<i>pra-vác-</i>
		<i>ás-</i>	→	<i>ás-</i>
183	20	破棄	→	破壊
	-1	<i>atīṣṭhat</i>	→	<i>atīṣṭhat</i>
185	1	I 1、1	→	I 1,1
	4	ブラーフイー	→	ブラーフーイー
	-14	アーディティヤ	→	アーディテヤ
186	-10	判断せざるを得ない。	→	判断せざるを得ない。
	-7	考えられない。	→	考えられない。
	-5	<i>s/*sh<sub>2</sub>uén-s/*sh<sub>2</sub>uén-s</i> etc.	→	<i>s/*sh<sub>2</sub>uén-s</i> etc.
	-2~-1		→	(段落を付けずに続ける)
187	1	<i>ārya-āryaman-</i>	→	<i>ārya-, āryaman-</i>
	11	<i>Samhitā</i> という	→	<i>Samhitā</i> ] という
	-5	FORTUNATOV	→	Fortunatov
189	-3	<i>kāmsya</i>	→	<i>kāmsya-</i>
190	10	l'Institute	→	l'Institut
191	14	<i>ousīa</i>	→	<i>ousia</i>

その他、「インド=アーリヤ」、「インド=イラン」という表記は雑誌の編集方針に従うものようであり、原稿には「インドアーリヤ」、「インドイラン」乃至「インド・イラン」とあった。この表記も一部に残っている。

古インド＝イラン語文献学から  
From the Viewpoint of Indo-Iranian Philology

後藤 敏文  
GOTŌ Toshifumi

Some comments on the contributions to the symposium will be presented here from a philological standpoint. Concerning M. KOISO's summary of research the following will be noted: 1-1. the word *indogermanisch* and MALTE-BRUN's "*indogermanique*" [Koerner 1981], 1-2. grammatical interpretation of *anās-* 'having no mouth', 1-3. possible relations between BMAC and the Indo-Iranians, and also the new findings from tumulus near Lop Nur. Against the view that there might have been no immigration at all of the *Āryans*, a comparable case of the Mycenaean Greeks will be suggested. It is always to be taken into consideration that the Indo-Europeans had carried few remarkable cultural goods or innovations. 2. Referring to H. KONDO's "Indus Civilization – Pantheon of the gods", a short episode of the *aśvattha* tree sprouted up on top of a horse's head will be presented from the oldest Vedic prose. 3. As to A. HORI's contribution about old Bactrian culture the author will repeat something in principle pointed out in 1-3. 4. In the case of J. FUKAO's "The Dravida and the *Ārya*", a fundamental doubt about the existence of alleged "loanwords" from the Dravidian in the older texts in Old Indo-*Āryan* will be expressed. The present author will pick up as an example a question about the river name *Sadānīrā-* in the *Śatapatha-Brāhmaṇa*. 5. In the case of the inspiring speech of T. FUJWARA "From Indus Civilization to Gandhāra", the present author must confess his doubts about the quality of the referred book by I MATAS. The author would like to add a few more points: two groups of the gods Deva and Asura (or *Āditya*), successive unification of the society, priests' business, and their religious texts followed in accordance with the increasing change of life from the nomadic to the sedentary. Some linguistic points are also referred to: dialect forms with *l*, the post-Vedic change of *d/dh* to *l/ lh*, retroflexes, change of word final *-as* to *-e*. The philologists are now obviously challenged to popularize their research results in order to share with other disciplines. 6. Related to the archaeological report about ceramics in the 2nd millennium B.C. by A. UESUGI, the present author will take up the work of [RAU 1972], and also his other monographs about Vedic "Altertumskunde".

シンポジウムは専ら古い文献を中心に研究している筆者にとって、刺激に満ちた貴重な学習機会であった。与えられた機会を利用して、異なるディスイプリンからの情報、見解、問題提起等を以下にメモしておきたい。

## 1. 小磯学「趣旨説明」中の若干の点について

1-1. 「インド・ヨーロッパ語族」の命名について、Thomas Youngによる *Indo-Europeans* (1813) と H. Julius von Klaproth の *Indogermanisch* (1823) とが紹介された。ドイツ語圏で用いられる *indogermanisch* という語は所謂 Klammerkompositum (前分と後分とによって、その間に挟まれる一連の概念を代表する複合語タイプ) と説明され、最も東 (または東南) の語派名「インド」と最も西 (西北) に位置するアイスランド語の属する語派名「ゲルマン」とを結んで、その間に括られる諸語派全体を表示するものと理解されている。「ヨーロッパ語」や「ヨーロッパ語派」というものは存在しないので、Indo-European という場合には地理的概念を意味することになり、印欧語族に属さない複数の言語を排除できなくなるという不合理がある。現在まで印欧語比較言語学の国際学会は存在しないが、事実上その役割を果たしているのが、ドイツ語圏を中心とする Indogermanische Gesellschaft である。同学会は書評を中心とする *Kratylos* という機関誌を発行しているが、その 27 号 (1982 [1983]) において、学会名に *indogermanisch* の語を採用する理由を改めて確認し、上記の理由の他、伝統的、便宜的理由を挙げている [pp. 221f.]。この確認と前後して命名史を巡る論考が続いた。それらによると、Malte-Brunなる人が1810年にフランス語で用いた *indo-germanique* という命名が Klaproth に影響を与えた可能性があるという [Koerner 1981: 1ff; 1982: 153ff.]。

1-2. 「人種問題」でかつて引かれることのあったという「黒い皮膚」(*kṛṣṇā- tvác-* など)、*vṛṣa-síprā*「雄牛の口髭 (あるいは髪飾り)」(いずれも形容詞ではなく実体詞。*vṛṣṇ-*「種牛」はアーリヤ社会では最高の存在の象徴であったことにも注意)、および *anās-* が何らかの根拠となりえないことは繰り返し確認されてきた通りであり、忘れ去られるべきものと考えられる。その中、*anās-* の論拠は解釈ではなく文法上の問題であり、厳密に確認されずに言及されることがあるようなので、ここで確認しておきたい。この語はそもそも『リグヴェーダ』に一度だけ現れる：*anās- dásyūn... mṛdhrāvācas*「口の無いダスユ (敵対する部族の者) たちを、ぞんざいなことばを持つ (ダスユたち) を」(RV V 29, 10)。時に *a-nās-* と分節し「鼻のない」つまり「低鼻の」の意味で解釈されることもあったようであるが、伝統的にも研究者の間でも一貫して「口 (*ás-*) のない」と解されてきた (母音の前では否定辞は *an-* の形をとる)。遅くとも 5 C. BC には成立していた『パダパータ』(『リグヴェーダ』の続け読みのテキストを単語に区切った読み、シャーカリヤ作) も、14 世紀の注釈家サーヤナもこの解釈に依っている。ただし、その意図するところが「ことばの話せない」か (日本語の「無口」が連想される)「[[ちや

んとした] 顔のない」であるかは決め難い。古インド＝アーリヤ語ではこの語に限らず「口」という単語が「顔」をも意味する（また、「口」という単語だけで「良い、優れた口」をも意味する）からである。「鼻」は語幹 *nás-*（女性名詞、例えば Instr. *nas-á* 「鼻で」）であり、「鼻のない」 *a-nás-* であれば、複数対格では語幹は弱い形をとるため、\**a-nas-ás* が期待される。語幹に長母音をもつ強語幹形 *nāsā* は双数主格形に見られるが「両の鼻孔が」を意味する。語幹 *nás-* の意味の中心はそもそも「鼻孔」にあるらしい。この双数形を基として女性名詞語幹 *nāsā-*, *nāsikā-* が作られ、「鼻」の意味で用いられるようになるが、『リグヴェーダ』より後の言語層において起きた二次的展開である。語幹 *nás-* はこのように Ablaut を示すので、複合語では *a-nás-* が期待されるのであり、この点、Ablaut を失った *vác-* 「ことば」の場合（例えば *pra-vác-*、上に引いた *mṛdhrá-vác-* など。 *ás-* 「口」もこれに属する）とは事情が異なる。*rujánās* という語が一度だけコブラの形をした「障碍」ヴリトラについて用いられており、「鼻をもがれた」と解釈することが可能であるが（命令形と前分にもつ「もげ、鼻を」から作られた複合語と考えられる：「鼻もげ」？）、単数主格形であるから *-nās* の長母音に問題はない。文献は [Mayrhofer 1992（以下 EWAia I と略）：182, 1996（以下 EWAia II と略）：30f., 452] 参照。

1-3. 考古学上の知見と文献学に基づく知識との照合について、小磯氏のレジユメは20世紀後半に提出された諸説を要領よく俯瞰しており、二次文献を精査する余裕のない者に貴重な情報を与えてくれる。中には既に歴史的意味しかもたない説もあろうが、主要な「思想史」が列挙されているものと信ずる。「思想史」というのは、この種の主張には、今までのところ確たる論拠を挙げ得ないことによる。1988年の項には Asko Parpola の説としてバクトリア・マルギアナ考古複合 (BMAC) とインド＝アーリヤ祖語の話し手との関連が挙げられている。Parpola 説の具体的内容を筆者は知らず、また、理解も難しいと想像するが、最近この点に触れる文を [後藤 2004a: 58f.] に付記として書いたので引用したい：

付記 この発表が機縁となり、小磯学氏の招待で7月18日に八王子で開かれた第37回南アジア研究集会に参加することができた。その折、堀暁氏の「バクトリアの青銅器時代、初期鉄器時代の文化」という発表を聞き、多くのスライドを見ることができた。所謂 BMAC、バクトリア・マルギアナ考古複合（前2200-1700頃）とそれに先行する時代の発掘報告である。Mundigak IV 期 (2500B.C.) に属する Togolok と Djarkutan という発掘地からのものと記憶するが、城塞に囲まれた住居コンプレックスの中央に近い建物に、漆喰に塗られた部屋があり、そこからエフェドラ（麻黄）が出土しているという。Djarkutan には「火の神殿」が中央にあり、これと向き合う形で「エフェドラの部屋」が置かれていたと記憶する。エフェドラ（麻黄）はインドの「ソーマ」、イランの「ハオマ」の正体と推定されるが、ヴェーダ時代のインドでは既に真正ソーマの存在は知られず、代用品が用いられていた。ソーマ（の代用品）を購入する手続きは祭式行作業の中に取り込まれているが、かつて異民族が遠くから売りに来たものを買入れた遺風を再現するものとなっており、値切り交渉が演じられる。イランでもハオマは貴重品であった筈である。Sariadini という学者は、これらの城塞都市そのものをインド＝イラン系の人のものとするそうであるが、『リグヴェーダ』で「城塞」と紹介されることのある *púr-* は木の杭などで作った仮設の柵であり [Rau 1976]、アーリヤ人が立派に石を積んだ城塞を作り得たとは到底思えない。むしろ、

インド・イランの人々の来襲から自らを守らなければならなかった「平和で」豊かな人々が築いたものであろう。この点、ギムプタスがドナウ下流域を中心に急に城塞や山城のような集落が出現すると指摘するクルガン第2期(4300-3500頃)と類似の事態(印欧語族の襲来)が一段遅れて東方に及んだ可能性が考えられる。この事態をもたらした人々がインド・イラン語派へと展開する、あるいは既にそのようなものとなっていた人々を中核とするグループである可能性は高い。インド・イランの人々が「興奮剤」として用いた印欧共通時代の蜜酒に代わって、新たに獲得したソーマ=ハオマの使用は、そもそも、ここに見られる麻黄を用いる人々から学んだものではなかろうか。先に述べたロプ・ノールの麻黄と共に今後検討すべき事柄である。[追記 11月5日、Witzel教授の発表の折確認したところでは、Sariadiniが報告する植物は麻黄ではないことが植物学者によって確かめられたとのことである。](なお、上記引用中の「サリアディニSariadini」は「サリアニディSarianidi」の誤りである。)

「追記」の部分は洵に不具合であるが、より確率の高い判断には、今後のBMAC前史の更なる解明と報告を待つ必要がある。さらに、新たに発掘が開始(または再開)されたと聞く楼蘭近郊の墓丘(紀元前2000年頃にまで遡るといふ)にまで連なる要素が出てくる可能性さえある。同報告書 pp.56f. に指摘したように、インドの女神Aditiとイラン(アヴェスタ)の女神Anāhitāとは、それぞれある共通の源から借用翻訳したものであることを推察させ、背後に母系社会の存在をも伺わせるが、ロプ・ノールの墓群に見られる女性の単独埋葬は、墓に麻黄が多用されていることと合わせて、これらの事情と関連する可能性を示唆するからである。いずれにせよBMACとの「関連」は「インド=アーリヤ祖語」より、インド=イラン共通時代段階に想定されるべき(少なくとも、一層深い)ものと思われる。論点は全て単なる想像と本当らしさを巡る主観的判断の度合いにすぎないが、Parpolaのその後の発表(例えば、[2002]。ただし、研究というより雑多なレベルの主張の羅列にすぎない)、Witzelの一連の論文ないし電子テキストによる発表(例えば、[2003])などはこれらの点に触れ、少なくとも文献や資料の示唆に富む。――上記の引用中、ヴェーダ文献に見られるプル *pūr*-が木の杭などで作った仮設の柵であることを[Rau 1979]を引いて述べた。アーリヤ人がインドの地で具体的に作りまた経験した「プル」はまさにそのようなものであるが(『リグヴェーダ』には、インダス文明の「都市」との遭遇を思わせる言及は見出せないと思われる)、インドラや火神アグニが「プルを破碎する者」*puram-darā*-とよばれる時に、かつて本格的な城塞に遭遇した時の記憶ないし造語を引きずっている可能性が全くないとは言い切れないであろう。

次に、『インドへのアーリヤ人の侵入説』への疑問・否定=考古学的物証の欠如』についてであるが、特定部族の進出と考古学的物証とが互いに照合すべきものとする前提そのものが疑わしい。特にインド・ヨーロッパ語族の場合には文化的な革新を自ら担うことが少なく(むしろ技術の蔑視を思わせる)、生活の中心は定住期を含んだ遊牧移動生活にあっただけになおさらである。この点についても、参考となる事例を上記の総合地球環境学研究所報告[後藤2004a: 46f.]から引用する：

線文字Bで書かれたミュケーナイ文書は紀元前1200年には確実に遡り、クノッソスのものは紀元前1400年に遡る可能性があるとのこと。ヴェントリス (Ventris, Michael) が1953年に解読に成功し、ギリシャ語であることが解りました。(中略)ところが、シンクレア・フッド (Hood, Sinclair) というイギリスの代表的な考古学者による『ギリシャ以前のエーゲ世界』という概説書が1967年に出版され、日本でその翻訳がよく使われていますが [村田数之亮 (訳) 創元社、世界古代史叢書2、1970]、彼は「この解読に賛成または反対する理由は根本的には言語学的であって、いささか難解である」と述べた後、「ここで私が提出しようとする青銅器時代末の主な出来事の概観とは、線文字Bの言語はギリシア語ではないこと、しかしそれはエーゲ世界でギリシアに先行したある言語 (本土起源であるか、あるいはよりありそうなクレタ起源であるかのいずれか) であること、そしてまたギリシア語を語る最初の定住者は、前13世紀末にペロポネソスにその地の諸宮殿の破壊者としてきたこと、これらの仮定にもとづいているのである」と述べています (127頁)。つまり、もしミュケーナイ文書が解読されていなかったら、純粋に考古学的知見から判断して、ギリシャ語を話す民族、諸部族のエーゲ海への進出は一段階遅い時代に想定されるということになります。考古学的証拠からある文化の担い手を確定することの危うさを示す典型的な例であると思います。先に触れた「海の民」のなかにはアカイア人に当たるとされる部族名 (ヒッタイト文書にはB.C.14世紀半ば以降現れる) が含まれますし、ミュケーナイの諸都市を始めとする青銅器文化を破壊し、鉄器をもたらしたこの部族移動の動乱期とギリシャ各部族のエーゲ海への進出とを重ね合わせて考える方が状況証拠としては自然なのでしょう。実際には、それに先だつことおそらく200年以上前からギリシャ語 (アイオリス方言) を話す人々がペロポネソス半島からクレタ島まで、それまでの文明状態と断絶を示さない形で進出し了えており、破棄の跡を特別残さずに王宮のある都市を作り上げていた訳です。

さらに、インド＝アーリヤとよばれる人々は構成された大「部隊」で一時に「来襲」したわけではなく、むしろ、彼らの定住 (大麦の栽培) を交えた遊牧移動生活 (理念として、彼らは牛によって生きていた) の結果として、小規模な部族単位で、三々五々カーブル山中に入って (しまい)、結果として、インダス上流域に進出したと考えられる点にも十分に注意しておく必要がある。好戦的であり、時に略奪を取ってするとしても戦闘を目的に生きているわけではなく、空隙のある新しい土地に、できるだけ摩擦を避けて移動していった筈である。

1-4. 小磯氏は A. Schleicher の分岐系統図を挙げているが、この点に関する私見についても、上記 [後藤 2004a]、特に、p.44、p.51 を参照していただきたい。

## 2. 近藤英夫「インダス文明－神々のパンテオン」

近藤氏は、神を表現するモチーフの一つとして、角の間に植物、特に菩提樹が描かれることを指摘している。この種の研究にヴェーダ文献から提供できる材料は殆ど無いが、最古の散文文献 (紀元前800年頃と推定される) に興味深い一節が見られるので紹介したい。『マイトラーヤニー サンヒター』のシュラウタ祭火設置祭に関する部分で、祭火を鑽り出すのに用いられるインドボダイジュの神聖性を根拠づける挿話である：

*Maitrāyaṇī Saṁhitā* I 6, 12: 106, 11-14 「プラジャーパティ (子孫の主) は子孫たち (もろもろの生物) を創出した後、[自分が] 空 (から) になったと思った。[そこで] 彼は馬 (*áśva-*) になって、一年間、下を向いて、大地に頭部をつけて立っていた (*atiṣṭhat*: 一年間草を食し続けた)。[すると] 彼

の頭頂からアシュヴァッタ (*aśvatthā*-インドボダイジュ) が生え出た。それが、アシュヴァッタがアシュヴァッタである所以である。それ故、これ (アシュヴァッタ) は祭式を領域とする (聖なる場面に用いられる)。[それは] プラジャーパティに由来するから。」

### 3. 堀暁「バクトリアの青銅器時代、初期鉄器時代の文化」

この発表が文献学にもたらすインパクトについては上記1-3にも触れた。発掘の進展次第では、考古学的知見と文献学的知見との間を詰める可能性を秘めている。小麦栽培の普及はインダス文明とも共通で、小麦栽培が事実上文献に現れないヴェーダ期のインド＝アーリヤ文化との大きな相違点である。先に触れた楼蘭近郊の墓群でも小麦が主要穀物であったことが知られる。「小麦」自体は *godhūma*- という語で Paippalāda 派の『アタルヴァヴェーダ』、『ヤジュルヴェーダ』のマントラ (祝詞) 以来知られており、従って紀元前 1000 年頃から存在は知られていたことになる。イラン語派 (例えば、新アヴェスタ語 *gāntuma*-) でもインド＝アーリヤ語派においても借用語であることに疑いはないが、その経緯は明らかでない。Witzel は 2004 年 11 月に総合地球環境学研究所で行った発表でこの問題に触れ、コーカサスを起源とし、BMAC を経由してインドとイランともたらされたとする見解を述べた [Witzel 2005]。また上記 [Witzel 2003] をも参照のこと。

### 4. 深尾淳一「ドラヴィダとアーリヤ - 南インド原史時代の文化における ‘アーリヤ’ 的要素」

この発表が取り上げる時代は、アーリヤ文化の北インド定着以降を中心としている。深尾氏の発表内容からは離れるが、この機会に原則的なことを述べておきたい。ドラヴィダとアーリヤ文化との関連を論ずる際に言語次元の検討が基礎となることはいうまでもない。ところが、この点にこそ厄介な問題がある。ヴェーダ語とよばれる古インド＝アーリヤ語の古い段階、少なくとも『リグヴェーダ』には、ドラヴィダ語「起源」であることが確かな単語は、具体的には一つも知られていないと思われる。文献の時代も異なるので、ある程度無理のないことである。それにもかかわらず、ドラヴィダ語からの借用語があるかのような解説が往々にして見られる。[Southworth 1995] は、例えば p.264 に「Proto-Indo-Iranian period に 5 例、Early Vedic period に 27 例、Later Vedic period に 8 例、Epic and Classical Sanskrit に 48 例」と、借用語数を列挙しながら、「音韻学的、文法的、ないし文意的基準から確率の高いものを数え上げた」旨注記するのみで、一つの具体的語形をも挙げない。活字はともすれば一人歩きするだけに、希望的状況証拠だけに基づいて判断の根拠を示さず、検証のしようがない主張を発表することは学術の原則に反する。叙事詩や古典サンスクリットの語彙についてさえ、信頼できる一覧は存在しないのではないかとと思われる。

一例として、サダーニーラーという河川名を巡る問題を取り上げてみたい。 *Śatapatha-*



*Brāhmaṇa* I 4, 1 に、有名な「部族の火の東漸」の物語がある。アーリヤたちが、現在のガンダク川とされる *Sadānīrā-* の西側まで進出を了えており、焼き畑によりさらに東に進出する経緯を反映する神話である。河川名の前半 *sādā* は印欧語起源の副詞「いつでも」と考えられる。*nīrā-* の部分には、ドラヴィダ語起源と思われる（タミル *nīr* 「水」、ブラーフィー *dīr* など）後の文献にも現れる *nīra-* 「水」が一般に想定され、「一年中水をたたえる」川と解釈されている（[EWAia II: 50] 参照。また後の文献に見られるこの川への言及については、[Salomon 1978: 40ff., 51ff.]）。

しかし、印欧語起源の *sādā* に合わせて、『リグヴェーダ』以来見られる *nīla-* 「青黒い」の *r* 方言形を想定すれば、「常に青黒い」意味の限定複合語と解釈され（「美しき青きドナウ」参照）、アクセント位置も規則通りである。「常に水がある」という解釈では *Bahuvrīhi* 複合語となり、アクセント位置が異例となる。東インドに *r* 語形が現れる例としては、同じく河川名であるパーリ語 *Nerañjarā-*（サンスクリット *Nairañjanā-*、現代名 *Līlājan-*、*Nilājan(ā)-* [EWAia II 296; Falk 1993: 213] が挙げられる。

##### 5. 藤原達也「インド＝アーリヤに関する諸問題ーインダス文明からガンダーラまで」

ロマンをかき立てる発表ではあるが、それぞれの分野の研究者が（少なくともそのような形では）取り上げないような二次文献に依拠して話を組み立てているという印象を禁じ得ない。発表の前半は E.A. i Matas による *R̥gvedic Society* [1991] の紹介であるが、紹介には価値判断、評価が伴うべきである。『リグヴェーダ』に見られる神々に、デーヴァたち（「天に存する」者たち）のグループと、アスラたち（「首長、主人たち」あるいはアーディティヤ（「Aditi の息子」）たちのグループとがあることは周知のことである。前者には古来の（従って部分的には印欧起源の）自然神、英雄神が含まれ、後者の背景にはインド＝イラン共通時代に起こった社会制度の神格化が想定される。インドでは最終的にデーヴァたちが神々として崇められ、アスラたちは恐れられ、「神の名に値しない神々」になってゆく。イランでは、おそらくアスラの代表ヴァルウナにあたる神がザラトウシュトラの改革によって最高神 *Ahura- Mazdā-* 「知恵（理性）なる主」の位置に置かれ、デーヴァ（「ダエーワ」）は「悪い神、悪魔」になるという、互いに反対方向の選択が起こる。デーヴァたちの英雄的行為はインドラの武勲の中にまとめられ、その理念的中心は（かつての）移動期の生活に置かれる。一方、「アスラ」的な性格を代表する（ないしはインドにおいてもそのような性格を残した）ヴァルウナには定住期の生活規範の色彩が強い。これらのことはいわば当然の前提であるが、筆者が要点を確認したものに、[Gotō 2000]、とくに pp. 159ff.、また簡単な解説としては [後藤 1994: 6f.] のほか、[後藤 2004b] も参考になる。

ヴェーダ文献とアーリヤ文化を理解する際にはそのようなインド＝イラン共通時代という出

発点を押さえることも重要であるが、ヴェーダ文献成立史の検証からもアーリヤの諸部族がインド亜大陸に進出してゆく過程を理解する上でヒントが得られる。先述の〔後藤1994〕の解説中にも記したが、ヴェーダ文献群の編集は祭式の整備とともに進行した〔後藤2003〕。祭官階級は、シュラウタ祭式という天地、自然、時間の維持、部族全体の繁栄に関わる祭式を一つ一つ整備し、構築してゆく過程で、もともと様々な起源・専門をもっていた祭官職に役割を分担させて統合し、ブラーフmana（「ことばの実現力を職業とする者たち」、婆羅門）の地位を確立していったものと考えられる。『リグヴェーダ』の編集はこのダイナミックな祭式および祭式文献・学派の整備過程に先立つが、既にそうした動きは起こっていたであろう。第9巻が搾られたソーマを濾過する時に唱える讃歌だけを各家系の歌から抜き出して編集したものであることもこれと関係する筈である。

第7巻を伝えたヴァスィシュタ家が所謂アスラたちの系譜に属するヴァルウナ、ミトラをはじめとするアーディティヤ神たちと深く関係し、毎朝、太陽を正しく昇らせるために言祝ぎの歌を歌うことを職業の中心としていたらしいことは上述の論文で論じた。しかし、『リグヴェーダ』の歌を伝えた各家系は、全体としては同じような神々の讃歌を揃えており、アーリヤとしての統一性が強く意識されていたことも確かである。インド＝イラン共通時代に遡る「人工語」であるアリヤマン *áryaman-*（動詞語根以外に接尾辞 *-man-* をつけて作られた唯一の単語、原義はおそらく「部族の成員たること」、即ち結婚、客人接待などに関する部族慣習法の神格化）は大家族の上に制度・文化を共有する部族意識があったことを証する。同時に、異部族との軋轢・闘争があったことをも意味する。しかしアーリヤの諸部族が大挙して「一枚岩」で押し寄せたのではないことは、上の1-3に述べたとおりである。

藤原氏は *súrya-*「太陽」を、*sūri-*「親方」と結びつけているが、この見解が *i Matas* に遡るものかどうか調べる余裕がない（一応頁をめくってみたが、〔*i Matas* 1991〕は p.91 に *āhavanīya-* という不可解な語形を引き、しかも “connected with the libation” と説明していることから考えて、ヴェーダを原典で読んだことのない作家の著述と判断せざるを得ない）。無論 *āhavanīya-* は元來動詞の Gerundiv 形で AV 以来用いられ、「〔その中に〕 献注されるべき [祭火]」を意味する。ヴェーダ祭式文献は、いわば、この祭火を中心に論じられているのであり、ヴェーダ学者がこの語形を知らないということは考えられない。 *súrya-* が「太陽光」を意味する、古い活用（\**l/n*-Heteroklitikon）を残す中性の物質名詞（主格 \**sāh<sub>2</sub>u<sub>1</sub>*、所有格 \**sh<sub>2</sub>uén-s*/\**sh<sub>2</sub>u<sub>1</sub>én-s*\**sh<sub>2</sub>u<sub>1</sub>én-s* etc.、古インド語 *svār-*、*súvar-*）に遡ることは論ずるまでもないが、各言語がこの物質名詞から人格的な存在（神）としての「太陽」を個別に工夫して作った経緯（ギリシャ語ホメロス＝イオニア方言 *ēēlios*、アッティカ方言 *hēlios*、ラテン語 *sol*、ゴート語 *sauil* など）はインド・ヨーロッパ語族の歴史的展開を考える上で一つの視点を与える。

結論については、小生の講演記録を参照されたい〔後藤2001: 26-40. とくに pp. 29f.〕。ま

た、*arí*, *arya-*, *ārya-āryaman-*については、[後藤 2004a: 70] を参照していただきたい。

「アーリヤ人」たちのインダス上流への侵入（カーブル越え）が波状的に行われたであろうことと、古インド＝アーリヤ語に見られる方言形的な現れとが関連するであろうことは当然予想される。しかし、方言的現象は、今日現実に見られる方言を考えても推測できるとおり、多層に亘る個別的現れの集積であり、文語に浮上した諸要素から何らかの解釈を引き出すことは難しい。論拠は多義的であり、解釈は恣意的にならざるを得ない。中期インド語に見られる東部方言の影響（Māgadhism）としての *l* 形を『リグヴェーダ』の言語段階と比べる時には当然不確定要素が大きくなる。

藤原氏のレジュメからは『リグヴェーダ』に既に Magadha という部族（地域）が知られていたかのように見えるが事実に合わない。「Śākalya（前 1500～1200 年頃）編 *Rg-veda Samhitā* という想定は、『リグヴェーダ』を伝承している学派名 Śākala（もう一つは Bāṣkala 派、いずれにしても実体は殆ど無い）を、1-2 に触れた Śākalya その人に帰したものであろうが、彼の年代をそこまで遡らせることは無理である。シャーカリヤは『リグヴェーダ』の続け読みテキストを単語に分けた「最初の文献学者」であり、既に編集固定されたテキストを見ていたと考えられる。無論、彼がヴェーダの編集固定そのものに関わった可能性自体は考えてみる価値があるが（編集自体には Kāṇva 家に関わっていたことが想像される。テキストの固定伝承は教師の存在とその権威とを前提とする）、ブラーフマナ文献の末期からアーンヤカ、シュラウタストラ古層へ懸けての時代を想定する方が無理がない [Oldenberg 1888: 380f.; Hoffmann 1967: 146ff.; 後藤 2003: 7]。

現在用いられる『リグヴェーダ』のテキスト（伝承）では母音間の *d/ḍh* は *l/lh* に変化している。藤原氏は Pāṇini（の伝承されたテキスト）にこの変化が見られないことを指摘しているが、『リグヴェーダ』のカシミール写本（後 13 世紀とされてきたが、より遅いとする説もある）にも *l/lh* は見られない。インド西北端地方にはそもそもこの音が見られないため確定的なことは言えないのである。この変化が本来の『リグヴェーダ』とは関係なく、伝承過程で起こった変化であることは、『リグヴェーダ』冒頭に現れる *īḍya-* の語から明らかである。韻律上ももと *īḍiya-* 従って母音間の筈であるが、*īḍya-* と固定伝承されたために母音間で起こる変化を被っていない。この現象と二次文献については、[Witzel 1989: 165ff., 211ff.] に詳しい。

— FORTUNATOV の法則なるものが手品の道具のように息を吹き返すことがあるのは残念である（例えば、[Deshpande 1995] にもこの批判が当てはまる）。レジュメに挙げられた 3 語ともヴェーダ期の言語には見られない後の語である。

最後に、この種の論考に繰り返し見られるいくつかの点について注意を喚起したい。反舌音（retroflex）化は汎インド的現象ではあるが、アーリヤ語の場合には多くが音韻法則上の結果

と関わっており (rukiの法則と dental assimilation など)、何らかの言語からの単なる影響で説明できるものではない。その他「丸いもの、身近の可愛いもの」などにも現れる (ゲルマン語派に現れる Gemination と一部比べられるところがある)。それ以外に、語源不明の反舌音を示す語彙が当然少なからずあるが、その場合、Substrat は特定できない。— インド学者の間で一般に「東部方言」として済まされる語末の  $-as > -e$  の変化はイラン側のコータンサカ語、ソグド語、インドでは中期の西北方言 (ガーンダーリー)、スリランカのシンハラ語などにも見られる。古インド=アーリヤ語 (ヴェーダ語、サンスクリット語) でも語中の変化はこれに倣う。つまり、ここには一種の「文化圏論」的な現象が見られるのであり、かえって、インドとイランの「標準語」に見られる  $-as > -ah > -o$  の変化の方が特異というべきかもしれない。アーリヤ文化における標準語化、統一化の力が極めて強かったことを伺わせる。方言的現象を収集したものとしては上掲 [Witzel 1989] が網羅的である。

総じて、ヴェーダ語、ヴェーダ文献の実体が専門の文献研究者の外に知られていない現状に問題がある。例えば、神話や美術の解説にインドラを「雷霆神」とする説明を見かけることが多いが、『リグヴェーダ』の原典に徴する限り、インドラが雷を投ずるかのように解釈できる箇所が皆無ではないとしても、インドラの本質には関わらない。ヴリトラ退治の時に雷を発して身を守ろうとするのはヴリトラの方である。「城塞」については1-3に触れた。藤原氏の問題提起を機会に、いささか論点を拡大して原則的なことを記したが、ヴェーダ研究に携わる者の一人として、研究現場の知見の普及に努めるべき責任を自覚させられた次第である。

#### 6. 上杉彰紀「南アジア考古学における「インド=アーリヤ」に関する覚書—「ポスト・ハラッパー文化」期の社会の復元に向けて」

これは文献学者にとっても前2000年期の資料を押さえる上で貴重な発表である。前にも触れたように、アーリヤ人たちは特別な文化的・技術的財産をもたらさず、主な技術を非アーリヤに頼っていたらしい。これに加えて、ヴェーダ文献には祭式空間だけを語る神聖なテキストという限定があることから、文献からは、極めて限られた情報しか得られない。

上杉氏の今回の発表の中心を成す土器については、[Rau 1972] が、ヴェーダ文献から知られる製法、製品に関する全情報を収録しており参考になる。それによると、土器職人はシュードラで、祭式に参加できない。また、轆轤を用いることは「アスラの」であり、祭式からは排除される。祭式用にはアーリヤに属する者が手で作らねばならない。つまり、彼らは、日常、非アーリヤの職人が轆轤で作った土器を用いていたのであり、ヴェーダ祭式に言及されるのは往古の、おそらくはインド侵入以前の製法ということになる。

製作に関する記述は、焼成煉瓦を5層に積み上げる大規模火壇設置祭に用いる火鉢 (*ukhā-*、英語の oven、ドイツ語の Ofen などに関連)、ソーマ祭に差し挟まれる Pravargya 祭という儀

礼において、ミルクを入れて熱する火壺のような容器 (*mahāvīra*-「偉大な勇者」、ウカーに似る)、毎夕毎朝のAgnihotraのためにミルクを熱する鉢、の3つの製法に限られる。濡らした砂の上に粘土を置き、水を注いでこねるが、その際、古いテキスト層によれば山羊の毛、石灰石の粉、土器のかけら、レイヨウの毛が、またより新しいテキスト (*Śatapatha-Brahmaṇa*) では、薬草の煎じ汁、それを捏ねる時に出る泡、山羊の毛、小石 (石灰石?)・石・金属成分を潰したものが混ぜ合わされて、こね上げられる。Pravargyaを扱うテキストでは、イノシシが鼻で掘り起こした土、蟻塚から取った固まり、同定不可能な植物の一部、山羊のミルク、さらに新しいテキストでは山羊やレイヨウの毛が挙げられている。

底になる部分の粘土の縁を上方に曲げ伸ばし、その上に紐状にのばした粘土をのせ、成形する。『シャタパタ・ブラーフマナ』の火鉢製造では、底から、4本の紐状の粘土を上から3分の1のところまで懸けて補強する。さらに突起などがつけられることもある。表面をなだらかにするために、竹箆や草が用いられることもある。

日なたで、馬糞を焚いて出る煙を用いて乾燥させる。四角い穴を掘り、底に焚き木を敷き、日干し煉瓦の層の上に、器を下向きに置き、上にも日干し煉瓦の層を置く。隙間を石で埋め、上を焚き木で覆って点火する。

焼成の初段階は「燻らせる」または「煮る、調理する」に当たる動詞で表され、次に「焼く」に当たる *pac* の段階に移る。Rau は、新しい焚き木は屋にだけ追加してよいという規定から、焼成には12時間以上かかったもの推定している。灰を取り除けて、冷却のために山羊のミルクを浴びせる。

Rau は教授資格論文 [1957] 以来、ヴェーダ期の生活財に関する論考を発表してきたが、[Rau 1983] において車を扱い、二次文献の目録を付してこの種の研究に区切りをつけた。その文献一覧に、織物 [1971]、金属 [1974] についての彼自身の研究も挙げられている。その後、凸レンズ [1982] のほか、弟子 K. Klaus による論考 [Klaus 1989] が続いた。

Rau 教授の下で Dr. phil. となった永ノ尾信悟教授 (東京大学東洋文化研究所) は、祭式文献に見られる料理や、後の文献をも含めた酒類について論文や報告を発表している。しかし、繰り返しになるが、ヴェーダ文献からの情報は限られており、初期仏典などから得られる知見と合わせた文献学的研究が待たれている。また、古代インドの文献そのものの性格と文献学の限界とから、二次文献は常に確認・改良・補充を迫られる性質のものである。

Rau が扱った金属について、補正すべき事項の一例を挙げる。『アタルヴァヴェーダ』(前1000年頃に遡る資料を含む) 以来テキストに確認される *kaṁśá-* という語は、「金属製の鍋、皿」を意味する。この語から作った派生語 *kāṁśya* は『シュラウタースートラ』(前5世紀頃) 以降に現れ、「真鍮の」、「真鍮」を意味する。このことは、金属 (おそらく真鍮) 製の新製品が外部からもたらされ、それまで知られていなかった材料が、製品から逆に名付けられたことを示唆する。

場合によっては、製品から材料（真鍮、あるいは銅と亜鉛）を回収した可能性も考えられよう。

2005年2月付記：Witzel教授の話では、Rau一連の著作は目下英訳中であり、まもなく出版される  
とのことである。

以上、当日のレジメとメモとを基に私見を記したが、発表者の論考と齟齬を来していない  
ことを願う。批判の意図はなく、考古学と文献学、そしてフィールド調査の諸学問や歴史学が、  
協力し合って実像解明に資すべき時代が至ったことを確認し、その意味での寄与を心懸けた。

## 引用文献

- BROGYANYI, B. and R. LIPP (eds.) 1993 *Comparative-Historical Linguistics: Indo-European and Finno-Ugric*. Freiburg: University of Freiburg.
- CAILLAT, C. (ed.) 1989 *Dialectes dans les littératures Indo-Aryennes*. Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, Serie in-8, Fascicule 55. Paris: Diffusion de Boccard.
- DESHPANDE, M.M. 1995 (1997: New Delhi) "Vedic Aryans, non-Vedic Aryans and non-Aryans". in Erdosy, G. (ed.) 1995a: 67-84.
- ERDOSY, G. (ed.) 1995a *The Indo-Aryans of Ancient South India*. Berlin: Walter de Gruyter.
- ERDOSY, G. (ed.) 1995b *The Indo-Aryans of Ancient South Asia. Language, Material Culture and Ethnicity*. Berlin: Walter de Gruyter.
- FALK, H. 1993 "Zur wurzel *il* im Sanskrit und Pali". in Brogyanyi, B. and R. Lipp (eds.) 1993 : 203-216.
- FORSSMAN, B. and R. PLATH (eds.) 2000 *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik. Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft vom 2. bis 5. Oktober 1997 in Erlangen*. Wiesbaden: Richert.
- GOTÔ, T. 2000 "Vasiṣṭha und Varuṇa in RV VII 88—Priesteramt des Vasiṣṭha und Suche nach seinem indoiranischen Hintergrund". in Forssman, B. and R. Plath (eds.) 2000: 147-161.
- HOFFMANN, K. 1967 *Der Injunktiv im Veda*. Heidelberg. Carl Winter.
- I MATAS, E.A. 1991 *Ṛgvedic Society*. Leiden: Brill.
- KLAUS, K. 1989 *Die Wasserfahrzeuge im vedischen Indien*. Mainz: Akademie der Wissenschaften.
- KOERNER, K. 1981 "Observations on the Sources, Transmission, and Meaning of 'Indo-European' and Related Terms in the Development of Linguistics". *Indogermanische Forschungen*, de Gruyter, 86: 1-31. Berlin.
- KOERNER, K. 1982 "On the Sources and Meaning of 'Indo-European'". in Maher, J.P., A.R. Bomhard and E.F.K. Koerner (eds.) 1982: 153-180.
- MAHER, J.P., A.R. BOMHARD and E.F.K. KOERNER (eds.) 1982 *Papers from the 3rd International Conference on Historical Linguistics*. Amsterdam: John Benjamin.
- MAYRHOFER, M. 1992 & 1996 *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen (EWAia)*. Vols. I & II. Heidelberg: Carl Winter.
- OLDENBERG, H. 1888 *Die Hymnen des Ṛigveda: Metrische und textgeschichtliche Prolegomena*. Berlin: Verlag von Wilhelm Hertz.
- OSADA, T. (ed.) 2005 *Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Occasional Paper 1, Indus Project. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.
- PARPOLA, A. 2002 "Proto-Indo-Aryan and Proto-Iranian". in Sims-Williams, N. (ed.) 2002: 43-102.
- RAU, W. 1957 *Staat und Gesellschaft im alten Indien, nach den Brāhmaṇ-Texten dargestellt*. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- RAU, W. 1972 *Töpferei und Tongeschirr im vedischen Indien*. Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.
- RAU, W. 1976 *The Meaning or pur in Vedic Literature*. München: Wilhelm Fink.
- RAU, W. 1983 *Zur vedischen Altertumskunde*. Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.
- SALOMON, R. 1978 "The Three Cursed Rivers of the East, and their Significance for the Historical

- Geography of Ancient India”. *The Adyar Library Bulletin*, 42: 32-60. Madras.
- SIMS-Williams, E. (ed.) 2002 *Indo-Iranian Languages and Peoples*. Oxford: Oxford University Press.
- SOUTHWORTH, F.C. 1995 (1997: New Delhi) “Reconsidering Social Context from Language: Indo-Aryan and Dravidian”. in Erdosy, G. (ed.) 1995b: 258-277.
- WITZEL, M. 1989 “Tracing the Vedic Dialects”. in Caillat, C. (ed.) 1989: 97-265.
- WITZEL, M. 2003 “Linguistic Evidence for Cultural Exchange in Prehistoric Western Central Asia”. *Sino-Platonic Papers*, Philadelphia. 129: 1-70. ([http://www.fas.harvard.edu/~sanskrit/images/C\\_ASIA\\_.pdf](http://www.fas.harvard.edu/~sanskrit/images/C_ASIA_.pdf))
- WITZEL, M. 2005 “Central Asian Roots and Acculturation in South Asia: Linguistic and Archaeological Evidence from Western Central Asia, the Hindukush and Northwestern South Asia for Early Indo-Aryan Language and Religion”. in Osada, T. (ed.) 2005: 87-211.
- 後藤敏文 1994 「神々の原風景 ヴェーダ」. 上村勝彦・宮元啓一 (編) 『インドの夢・インドの愛—サンスクリット・アンソロジー』 所収: 3-42. 春秋社.
- 後藤敏文 2001 「サッティヤ *satyá-* (古インド=アーリヤ語「實在」) と ウースィア *ousía* (古ギリシャ語「実体」) —インドの辿った道と辿らなかった道と」 『古典学の再構築』ニューズレター 9: 26-40. (<http://www.sal.tohoku.ac.jp/indology/> から PDF テキストが見られる)
- 後藤敏文 2003 「ヴェーダ文献の原典・伝承と研究・解釈」 関根清三 (編) 『論集 III 本文批評と解釈』 A02 「本文批評と解釈」 班研究報告書所収: 12-20. 神戸. (<http://www.sal.tohoku.ac.jp/indology/> から PDF テキストが見られる)
- 後藤敏文 2004a 「インド・ヨーロッパ語族—概観と人類史理解へ向けての課題点検」 『ミニシンポジウム: ユーラシア言語史の現在 2004. 7. 3-4 報告書』 (上) 所収: 31-64. 総合地球環境学研究所 (Project 4-3FS, リーダー木下鉄矢).
- 後藤敏文 2004b 「人類と死の起源—リグヴェーダ創造讃歌X 72」. 仏教文化学会十周年・北條賢三博士古稀記念論集 『インド学諸思想とその周延』 所収: 415-432. 山喜房佛書林.

## 第37回南アジア研究集会に参加して 37th South Asian Seminar in Tokyo

小西 正捷

KONISHI Masatoshi A.

On this occasion of the 37th Meeting of South Asian Seminar that has started in 1967, the commentator reviews the brief history of the South Asian studies in Tokyo during 1960's and 70's including the start of our Indian Archaeological Society and other study groups. Another comment was on the papers presented to the Symposium on 'Aryan' problems particularly those based on art and archaeology, expecting them to have even more sound foundation of actual materials on which they depend.

## 目次

[ 論文 ]	頁
ガンガー中原の考古学—金石併用期の解明 (英文)	ブルジョーッタム・シン 1
ガンガー中原の鉄器時代—技術的考察 (英文)	ラビーन्द्रラ・シン ..... 17
初期インド美術におけるトーラナの表現 (英文)	パルール・パーンディヤ=ダール 33
ヴィジャヤナガル美術におけるイスラーム的要素 (英文)	アニラ・ヴァルギース 51
[ ノート ]	
サウディアラビアの岩刻画 (英文)	マジード・ハーン ..... 63
ガンダーラ、シャーラダー碑文の紹介 (英文)	ナシーム・ハーン ..... 73
東南アジアの瓦覚書	大谷宏治 ..... 85
マールワール王国の都マーンドゥー	
—融合文化の形成とマールワール派絵画の成立	石川 寛 ..... 107
マールワール派細密画とマーンドゥー	辻村節子 ..... 122
南アジアの鎌—現代パキスタンの事例から	遠藤 仁 ..... 130
[ 南アジア研究集会 = サマーセミナー報告 ]	..... 135
趣旨説明	小磯 学 ..... 136
中央アジアの考古学—後期青銅器時代から初期鉄器時代への変遷	
	堀 暁 ..... 141
ドラヴィダとアーリヤ—南インド原史時代の文化における‘アーリヤ’的要素	
	深尾淳一 ..... 150
インド=アーリアに関する諸問題—インダス文明からガンダーラまで	
	藤原達也 ..... 159
南アジア考古学における「インド・アーリア」に関する覚書	
—「ポスト・ハラッパー文化」期の社会の復元に向けて	上杉彰紀 ..... 173
コメント：古インド=イラン語文献学から	後藤敏文 ..... 179
第37回南アジア研究集会に参加して	小西正捷 ..... 191
[ 例会報告要旨 ]	..... 195
[ ニュース ]	..... 201
[ 訃報 ]	..... 211
[ 新刊紹介 ]	..... 214
[ インド美術・考古学関係文献抄 ]	..... 220
[ 執筆要項 ]	..... 224